公益財団法人ギャラリー エー クワッド
136-0075 東京都江東区新砂 1-1-1
竹中工務店東京本店1F
Tel: 03-6660-6011
Fax: 03-6660-6097
E-mail: gallery@a-quad.jp

GALLERY A4
1-1-1 Shinsuna Koto-ku
Tokyo 136-0075, Japan
Tel: +81-3-6660-6011
Fax: +81-3-6660-6097

https://www.a-quad.jp/

GALLERY A4

建築家・吉村順三の眼（まなざし）

JUNZO YOSHIMURA'S VISION

アメリカと日本

Between the U.S. and Japan

レーモンド・ファーム（2023年8月9日／撮影：岡部三知代）

吉村順三とアメリカ

岡部三知代（ギャラリーエークワッド 館長、主任学芸員）

2023年の8月、ペンシルベニア駅（NYC）から車で1時間ほど郊外へ向かう林道を走り、吉村順三がかつて過ごした、ニューホープのレーモンドファームを訪ねた。吉村順三は、レーモンドに呼ばれ、1940年から14か月ここで暮らした。この農場とスタジオは、ノエミ＆アントニン・レーモンドが、フランク・ロイド・ライトのタリアセン・フェローシップに似た、農業体験と所員の教育をするスタジオとするために、農家や納屋を改修した自邸である。事務所の見習いたちは、農場の手伝いをするだけでなく、ここに住みスタジオで働くことで建築を学んだ。それは単なる職業を身につける場だけではなく、晴耕雨読を共に過ごしながら、レーモンドの自然観、生き方そのものに触れる場であった。丘に立つその石積みの家（スタジオ）は、クエーカー教徒による気候風土に耐える頑強な家で、レーモンド夫妻はその家を改装し、内装に木造の丸柱と梁の架構を組み、大きく開いたガラスの開口部に、日本で作って送らせた障子を嵌めた。この障子は吉村が日本の伝統的なデザインとしてレーモンドに伝えたものである。

到着してしばらくすると、レーモンド夫妻の孫であるシャーロットさんが出迎えてくれた。彼女は、祖父母の理念を受け継ぎ、このファームに暮らしながら、老朽化した建物を、アーティストレジデンスとして開放すると同時に、建築の技術の伝承と文化交流の場として障子や襖の張替えのワークショップなどを催している。おかげで、吉村が暮らしていた時と、ほぼそのままの姿で建物が保存されている。

ダイニングの部分は増築部であろうか。付随した木造のテラスが庭へと繋がっており、休憩椅子や水撒きホースを巻く木製具まで作りこまれており、生活空間の所々にデザインが施され、使い手の感性がみえる。シャーロットさん特製の採れたて野菜ランチは、かつての吉村がノエミ夫人と語らい、事務所員とともに食卓を囲んだ風景が追想された。

本展は、戦前に吉村が見た「アメリカの対等で自由なモダンライフ」と、戦後に、吉村がアメリカに伝えた「日本の自然観とミニマリズム」の、両方に通底する眼差しを追うものである。吉村の生きた時代、ル・コルビュジエは、「住宅は住むための機械である」と言い、一気に世界はモダニズムの潮流を迎えた。しかし吉村は、それに動じず「住宅」を基本に、その機能を独自に「火と水と風と木と…」その中心に人を置き、自らの身体感覚と手触りを大切にした。

吉村はいかなる時も、プロポーションの大切さを謳った。プロポーションとは単なる造形的な寸法の話ではなく、大きな意味を含み、経済的にも時間的にも整ったバランス状態のことを示す。吉村に自邸の設計を依頼した園田春子氏は、その住まいを「何もかもが揃っている宝箱のようだ」と語る。吉村の建築空間には、疑問が立たない。空間の清い流れは自然そのものだ。

吉村が建築に問う「品位」とは、素養が時間をかけて紡ぎ育てるもの。時代は変わっても身体は変わらない。新しい技術や思想の潮流も、身体感覚を失うことがなければ、吉村順三が残した縦糸に掛かる横糸となり、美しい建築のある風景が織られることだろう。この機会が皆さまの暮らしの半径に触れることができれば幸いである。

Junzō Yoshimura and America

Michiyo Okabe (Director / Chief curator, Gallery A[4])

In August 2023, I visited the Raymond Farm in New Hope, which was owned by Noémi and Antonin Raymond, where Junzō Yoshimura once spent time. This farm is about an hour's drive from Pennsylvania Station along a wooded road leading to the countryside. This was where Junzō Yoshimura, at Antonin's request, lived for 14 months from 1940. The farm and studio were the residence of Noémi and Antonin Raymond, who renovated the farmhouse and barn to serve as a studio in the manner of Frank Lloyd Wright's Taliesen Fellowship. Here interns trained and directly experienced farming. Apprentices in the office not only worked on the farm, but also absorged architecture through living and working in the studio. It was not only a place to learn the profession, but also a means of gaining exposure to the Raymonds' views on nature and life while working together outside on sunny days and inside reading on rainy days. Their home (studio), originally built as a sturdy Quaker house on a hill withstand the forces of nature, was renovated by the Raymonds' in a wooden post-and-beam frame style for the interior, fitted with Japanese fusuma, and the wide glass openings, were fitted with shoji screens made in and sent from Japan. These shoji screens were introduced to Raymond by Yoshimura as an example of traditional Japanese design.

Shortly after my arrival, I was greeted by Charlotte, the Raymonds' granddaughter. Having inherited her grandparents' philosophy, she chose to live on the family farm and has somce opened the complex to the public as an artist's residence and farm center as a place to pass on architectural skills and engage in cultural exchange through activities such as workshops on replacing shoji and fusuma sliding doors. Thanks to these efforts, the building has been preserved in almost the same condition as it was when Yoshimura lived there.

The dining room area and the accompanying wooden terrace, which leads to the garden, appear to be an extension. Even the chairs and wooden fixtures for wrapping the watering hose are elaborately designed, revealing the user's sensibility in various details of the living space. Charlotte's special lunch of freshly picked vegetables evoked scenes of the past when Yoshimura would talk with Noémi and sit around the table with the staff.

This exhibition traces the vision that runs through both the "egalitarian and free modern life in America" that Yoshimura saw before World War II and the "Japanese view of nature and minimalism" that he introduced to the United States after the war. Yoshimura lived in the age of Le Corbusier, who said, "A house is a structure for living in(machines à habiter)," ushering in the modernist trend that took the world by storm. Yoshimura, however, was unfazed by this, and maintained a unique "residents"-based focus, which centered on people's activities surrounded by "fire (a fireplace), water (bathing and ponds), wind (ventilation), and wood (garden/landscape)," valuing his own physical senses and tactile experience.

At all times, Yoshimura professed the importance of proportion. Proportion is not merely a matter of structural dimensions, but has a larger meaning that indicates an economically and temporally well-ordered state of balance. Haruko Sonoda (a person who lived in one of his designed houses) describes her own residence as being "like a treasure chest that is fully equipped with everything." Yoshimura's architectural spaces leave no question unanswered. The clean flow of space feels entirely natural.

The "grace" that Yoshimura asks of architecture is something that is woven together and nurtured over time. Times may change, but the "body" remains the same. As long as our physical senses are intact, human beings will continue to appreciate the beauty of architecture even as new technologies and trends in thought are woven into it. I hope that this opportunity to experience Yoshimura's thinking will find its way into the scope of your daily life.

1章

吉村順三の歩み

生い立ちと出会い

吉村順三（1908–1997）の生い立ちから、建築家としての歩みの中で関わりを持った人々との出会いを紹介します。吉村は東京本所の呉服商の家に生まれ、江戸情緒豊かな下町に育ちました。旅行好きの父の影響もあり、幼少期から建築や風景をよくスケッチしました。祖母に連れられて見た帝国ホテルの空間に感動した少年は、やがて建築家・山本拙郎の建築思想に影響を受け、住宅の間取りに興味を持つようになります。1923年、関東大震災で焼け野原になった東京の光景は、吉村に住まいの重要性を強く印象付けました。旧制中学在学時から設計懸賞で入選するなど吉村は早くから建築を志し、東京美術学校入学後からアントニン・レーモンド（1888–1976）の建築事務所でスタッフとして働きはじめます。

西暦（年齢）	主な出来事	建築作品 ［＊］はアントニン・レーモンドの作品
1908（0）	9月7日　東京・本所生まれ。家業は呉服屋だった。	
1920（12）	ローマ・東京間飛行を記念しイタリア王妃に献上された記念帳に、吉村の図案「鈴虫」が掲載される。	図案「鈴虫」
1921（13）	府立第三中学校（旧制中学）に入学。中学時代には見様見真似で住宅のプランを描くことに熱中した。	
1923（14）	関東大震災で自宅付近が全壊。倒壊する建物やバラックの風景、東京が再建されていく姿から「建築というものを強烈に印象づけられた」という。この頃、新築間もないフランク・ロイド・ライト設計の帝国ホテルを見て、建築の素晴らしさに感銘を受ける。	
1924（15）		霊南坂の自邸＊
1926（17）	愛読していた建築雑誌「住宅」誌主催の「小住宅設計懸賞」に2案応募して1案入選、1案選外佳作となる。審査員には山本拙郎がいた。 東京美術学校（のちの東京藝術大学）入学。中国、韓国へ単身旅行。壮大な大陸の建築を体験したことで、日本の風景、建物の美しさに目覚め、以降京都・奈良の建築を度々訪ねた。	「住宅」誌小住宅設計懸賞応募案
1927（18）	海外の建築雑誌に掲載されたレーモンド自邸を探し訪ねる。翌年よりレーモンド事務所に通い始める。	
1931（23）	東京美術学校卒業。卒業制作のテーマは最小限住宅。アントニン・レーモンド建築事務所に正式に入所。	トレッドソン氏別荘＊／東京美術学校卒業制作／赤星四郎週末別荘＊
1932（24）		赤星喜介邸＊
1933（25）		軽井沢 夏の家＊
1939（31）		レーモンド・ファーム＊／日本文化会館 茶室＊
1940（32）	日米関係の緊張により帰米したレーモンドに呼ばれ、斎藤大使記念図書室計画のため、渡米。ニューヨークとフィラデルフィア郊外ニューホープを拠点に、住宅などを担当。休暇にはアメリカの民家などを見て回った。	斎藤博駐米大使記念図書室 計画案＊
1941（33）	太平洋戦争開戦直前に最後の引き揚げ船で帰国。当時ジュリアード音楽院に留学していたバイオリニストの大村多喜子と船内で出会う。同年12月8日、太平洋戦争開戦の日、新橋に建築設計事務所を開設。	モントークポイントの家＊
1944（36）	大村多喜子と結婚。同年、飛騨に疎開する。	
1945（37）	東京美術学校助教授に就任。	ヘボン記念碑
1946（38）	中野区雑色町（現・南台）に12坪半の家を3万円で購入。増改築を繰り返し、57年に自邸・南台の家の原型ができる。	
1947（39）		シルクフェアー
1948（40）		国際繊維展 日本館
1949（41）	画家・猪熊弦一郎や脇田和が主催する「新制作派協会」（51年、「新制作協会」に改称）の建築部に設立メンバーとして参加。吉村は新制作展に家具を例年出品した。	
1953（45）		有富邸（代々木の家）／東山邸／佐倉厚生園サナトリウム
1954（46）	3月−8月に渡米し、ニューヨーク近代美術館の展示のため、中庭に書院造の「松風荘」を建てる。	松風荘／三里塚教会
1955（47）		園田高弘邸（現・伊藤邸）／国際文化会館（前川國男、坂倉準三と共同）
1956（48）	1月−8月、文部省の出張で音楽ホール視察等のため欧米へ。11月、パーソン賞表彰式のためにアメリカへ。日本建築学会賞受賞（国際文化会館の共同設計）。パーソン賞受賞（ニューヨークの一連の作品）。	日本航空ニューヨーク支店 内装／モテル・オン・ザ・マウンテン 食堂棟
1957（49）	1月、モテル・オン・ザ・マウンテン増築等打合せのためアメリカへ。	南台の家（吉村自邸）
1958（50）		ハーグローブ邸／千駄ヶ谷の家／上野風月堂／高島屋ニューヨーク支店 内装
1959（51）		荻窪の家／ホテル小涌園／河庄／渡邉邸／脇田邸
1960（52）	皇居新宮殿の設計者に選定され、基本設計を行う。4月、ウェスタンホテルチェーン視察のためアメリカへ。	九重山の家／竹早高校八ヶ岳清里寮

西暦（年齢）	主な出来事	建築作品 ［＊］はアントニン・レーモンドの作品
1961（53）	3月、皇居新宮殿に関わる資料収集のため、アメリカやメキシコへ。	京極邸（青山の家）／ソニー研究所
1962（54）	東京藝術大学建築科教授に就任。	シュレム邸／軽井沢の山荘（吉村別荘）／ニューヨーク郊外のゲストハウス／同志社大学アーモスト館／NCRビル
1963（55）		横田歯科医院
1964（56）	7月、皇居新宮殿に関わる各国の建築の研究のため欧米を巡る。	箱根山マンション／東京倶楽部
1965（57）	5月と12月に、ゲストハウス計画打合せのためアメリカへ。	浜田山の家／俵屋
1966（58）	12月、ジャパン・ソサエティー設計打合せのためアメリカへ。	久我山の家／愛知県立芸術大学講義棟／湘南の家／御蔵山の家／文殊荘／アメリカーナビル
1967（59）	7月、ジャパン・ソサエティー設計打合せのためアメリカへ。	湘南茅ケ崎の家／愛知県立芸術大学学生ホール／ソルフェージスクール
1968（60）	3月と5月に、ジャパン・ソサエティー設計打合せのためアメリカへ。	新宮殿基本設計／愛知県立芸術大学図書館
1969（61）	3月にジャパン・ソサエティー設計打合せ、9月にジャパン・ソサエティー地鎮祭のためアメリカへ。	行川アイランド宿泊棟／笄町の家／青山タワービル・タワーホール／行川アイランドレストラン／愛知県立芸術大学奏楽堂・大学本部
1970（62）	東京藝術大学建築科名誉教授となる。7月にジャパン・ソサエティー打合せのためアメリカへ。	脇田和アトリエ山荘 ／亀倉邸（山中湖の山荘）／井の頭の家／ホテルフジタ／新日鉄新山谷寮・研修センター／愛知県立芸術大学美術学部棟ほか
1971（63）	3月、ジャパン・ソサエティー打合せなどのためアメリカ・カナダへ。6月、ジャパン・ソサエティー打合せなどのためアメリカへ。9月、ジャパン・ソサエティー開館式出席などのためアメリカへ。	猪熊邸／ジャパン・ソサエティー／高樹町の家／戦没船員の慰霊碑／愛知県立芸術大学教職員クラブ
1972（64）	ニューヨーク建築家協会デザイン優秀賞受賞（ジャパン・ソサエティー）。	高野パール／奈良国立博物館陳列館本館
1973（65）	5月、7月、10月に、ポカンティコヒルの家工事監理などでアメリカへ。	軽井沢の山荘C／軽井沢の山荘D
1974（66）	1月、ポカンティコヒルの家工事監理のためアメリカへ。	ポカンティコヒルの家／山中湖の山荘B／熱海自然郷の山荘／蓼科の山荘／大正屋／YCAビル・山脇服飾美術学院／三渓渓
1975（67）	2月、建築視察旅行でフランスへ。5月、アメリカ建築家協会名誉会員推薦などのためアメリカへ。日本芸術院賞受賞（奈良国立博物館）	山中湖の山荘C／木曾カントリークラブハウス
1976（68）		ホテル北野／矢吹邸／京都西山の家／伊豆多賀の家
1977（69）	3月、国際交流基金よりハイファ日本美術館敷地視察のためイスラエルへ。12月、ポカンティコヒルの家など訪問のためアメリカへ。	熱海マンション／祐天寺の家／在日ノルウェー王国大使館
1978（70）	2月、スミソニアン協会へ基本設計提出のためアメリカへ。	目黒ハウス／日産厚生会
1979（71）		八雲の家／都立大学の家／成城学園の家／軽井沢の家A／軽井沢の家B／川中嶋カントリークラブ・クラブハウス
1980（72）	スミソニアン計画案会議などのためアメリカへ。病に倒れ入院するが、およそ1年で現役復帰。	軽井沢の家C／文珠荘新館／軽井沢グリーンハイツ／高松郊外の家／蓼科の家／唐津の家／上北沢の家A／氷川ヒルサイド／レストラン・カーニバル
1981（73）		阿佐ヶ谷の家／祖師谷の家／伊豆高原の家／四季ジャパン・トータル・クラブ芦ノ湖別館
1982（74）	勲三等旭日章受章	尾山台の家／日産厚生会玉川病院／つきじ宮川本店
1983（75）		遠藤邸／上北沢の家B／軽井沢の山荘D／熊谷の家／カニンガム・ハーモニー・ハウス／レイモンドビル
1985（77）		軽井沢の家E／豊橋の家／南山の家／北野建設長野本社増築／松石ビル
1986（78）		下落合の家／インターボイス軽井沢山荘／神慈秀明会神苑祭事棟／ホテルジャパン下田本館
1987（79）		ホテルジャパン下田増築／軽井沢の家F
1988（80）		由比ヶ浜の家／北野美術館増築／茨城県立近代美術館／八ヶ岳高原音楽堂
1989（81）	毎日芸術賞受賞（八ヶ岳高原音楽堂）	八ヶ岳の家
1990（82）		総成カントリー倶楽部クラブハウス／軽井沢の家G
1991（83）	日本芸術院会員となる。	加藤栄三・東一記念館／川奈倶楽部岩本組社員研修所／草津音楽の森コンサートホール
1992（84）		上馬の家／北野建設東京本社ビル／すずのき恵比寿ビルディング
1993（85）		美浦ゴルフ倶楽部
1994（86）	文化功労者顕彰	茶苑海月／日光霧降カントリークラブ
1995（87）		高輪台の家（吉村邸）
1996（88）		中目黒の家／松永レディスクリニック／くらしき作陽クリニック（–2002）
1997（88）	4月11日、享年88歳で逝去。勲二等瑞宝章受章	矢吹記念美術館／聚光院伊東別院／奈良国立博物館東新館地下ラウンジ

主要参考文献：『別冊新建築 日本現代建築家シリーズ7 吉村順三』（新建築社、1983）、『吉村順三作品集(1) 1941–1978』（新建築社、1979）、『吉村順三作品集(2) 1978–1991』（新建築社、1991）、『火と水と木の詩 —私はなぜ建築家になったか』（吉村順三、新潮社、2008）

「生活の芸術」としての空間を求めて：
吉村順三がレーモンドから受け継いだもの

松隈 洋（神奈川大学教授、京都工芸繊維大学名誉教授）

1919年12月31日の大晦日、東京・日比谷に計画された帝国ホテル（1923）の設計助手として、F.L.ライトに随行して初来日したレーモンドが、その日に目にしたのは、1923年9月1日の関東大震災によってことごとく焼失する直前の、江戸情緒を色濃く残す簡素な木造の町並みと庶民たちの暮らしが織り成す何気ない日常の寛いだ風景だった。そこに、レーモンドは、後に「生活の芸術」と名づけて称賛する、現代建築の目指すべき「建築の原則」が無意識の裡に実行されている姿を見て取ったのである。こうして、あれほど憧れて師事したライトの元をわずか1年で離れて独立し、日本の木造建築から一人学び始めていく。

そんな日本に不慣れな異邦人のレーモンドにとって、1927年の夏、フランスの建築雑誌に載った自邸の模型写真に魅せられて目の前に現れた東京美術学校の学生で19歳の吉村順三は、得難い存在と思えたに違いない。なぜなら、東京・両国の呉服商の家に生まれ、白い土蔵と柳並木、掘割の錦絵のような風景、レーモンドの言う「生活の芸術」の下で育ち、京都や奈良、信州を訪ねて民家の実測を続けていた吉村は、木造文化のエッセンスを学ぶ上で最良の道先案内役となったからだ。また、吉村にとっても、レーモンドとの出会いは、漠然と憧れていた建築家の仕事場に身を置いて小さな住宅を次々と担当し、日本の木造建築の良さを、彼から学んだモダンな視点で具現化する貴重な経験へとつながっていく。

しかも、このようにして始められた、長い歴史と風土の中で培われた建築文化に学び、現代に活かそうとするふたりの試みは、日本だけにとどまらなかった。歴史の偶然は、場所を変えて、太平洋戦争前夜の日米関係の急速な悪化で帰国するレーモンドがアトリエと自宅を構えた、アメリカ東海岸フィラデルフィア郊外のニューホープでも続けられる。1940年、レーモンドの要請を受けて単身渡米し、そこに加わった吉村も、同じ眼差しで、敬虔なクエーカー教徒たちが造り上げた簡素で実用的な納屋や民家に魅せられ、それを採り入れた住宅を手がけるのである。

そして、1948年に日本へ戻り、設計活動を再開したレーモンドは、リーダーズ・ダイジェスト東京支社（1951）と木造の自邸・事務所（1952）によって、構造体を表し、内外の空間を一体化させた独自のスタイルを確立する。吉村も、アメリカで吸収した先人たちの知恵を取り入れながら、自らの方法を洗練させていく。こうして、ふたりが求めたのは、人間が人間らしく生活する空間をつくる普遍的な方法であり、それは、風土に根差し、歴史をつなぐことによってこそ発見できる、という確信に支えられていた。彼らの眼差しと遺された建築は、「生活の芸術」への道筋を見失い、拠りどころとなる身近な空間を喪失し、混迷を深めつつある現代の私たちに、大きな手がかりと励ましを与え続けている。

In Search of Spaces for the “Art of Living”:
Junzō Yoshimura’s Inheritance from Antonin Raymond

Hiroshi Matsukuma
(Professor, Kanagawa University / Professor Emeritus, Kyoto Institute of Technology)

On New Year’s Eve, December 31, 1919, Antonin Raymond accompanied Frank Lloyd Wright on his first visit to Japan as an assistant designer for the Imperial Hotel (1923) planned for Hibiya, Tokyo, and on that day, he witnessed the casual scenery of ordinary people’s daily lives and a simple wooden townscape that still retained a strong atmosphere of Edo, before the Great Kanto Earthquake of September 1, 1923, which burned everything to the ground. There, Raymond saw the unconscious implementation of the “principles of architecture” that modern architecture should aim for, which he later praised as the “art of living.” Thus, after only one year, he left Wright, whom he had admired so much and studied under, to set up his own business, and began to learn from Japanese wooden architecture on his own.

For Raymond, a foreigner then unfamiliar with Japan, 19-year-old Junzō Yoshimura, a student at Tokyo Fine Arts School, must have seemed like an invaluable presence when he appeared before Raymond in the summer of 1927, having been fascinated by a model of Raymond’s residence that had appeared in a French architecture magazine. This is because Yoshimura, who was born into a kimono merchant family in Ryogoku, Tokyo and had grown up in a woodblock print-like landscape of white earthen storehouses, rows of willow trees, and waterways – what Raymond called “the art of living” – and who continued to visit Kyoto, Nara, and Shinshu to take measurements of private houses, was the best guide for learning the essence of wood-frame culture. This encounter with Raymond would also lead to valuable experiences for Yoshimura, who found himself in the workplace of an architect he had vaguely admired, overseeing the building of a series of small houses that embodied the qualities of Japanese wood construction from the modern perspective he learned from Raymond.

Moreover, from these beginnings, the efforts of these two men to learn from an architectural culture shaped by a long history and traditions and apply it to the modern world would take them beyond the borders of Japan. Their unlikely history continued in New Hope, a suburb of Philadelphia on the East Coast of the United States, where Raymond, returning home on the eve of the Pacific War due to the rapid deterioration of Japan-U.S. relations, had set up his studio and home. In 1940, Yoshimura went to the U.S. alone to join Raymond at the latter’s request. He was fascinated by the simple and practical barns and houses built by devout Quakers, and designed houses that incorporated these features.

In 1948, Raymond returned to Japan and resumed his design activities, establishing a unique style with the Tokyo branch of Reader’s Digest (1951) and his own wooden residence and office (1952) that expressed the structural style and integrated the interior with the exterior. Yoshimura, for his part, refined his own methods while incorporating the wisdom from the past that he had gained in the U.S. Thus, the two sought a universal way to create a space where people could lead humane lives, supported by the conviction that this can only be discovered when it is rooted in the local culture and connected to history. At a time when we have lost sight of the path to the “art of living” and have lost the familiar spaces on which we rely, leading us deeper and deeper into confusion, their vision and architecture they left behind continue to inspire and encourage us today.

会場写真（撮影：光齋昇馬）

2章

吉村順三と レーモンド夫妻

〈戦前アメリカ〉
アメリカとの出会い

日米関係の悪化からアメリカに渡ったレーモンドは、斎藤博駐米大使の記念図書室を米国議会図書館に設ける計画のため、吉村をアメリカに呼び寄せます。吉村は1940年に渡米し、レーモンド夫妻が購入したフィラデルフィア郊外のニューホープの農園で、建築の仕事と農業を行い、アメリカの生活様式に触れます。中でもノエミ・レーモンドとの交流は、吉村が家具やテキスタイルに至るまでにデザインが施され、音楽や絵画を置き、同僚たちと語らう芳醇なライフスタイルに触れる機会を与えました。14か月の滞在中、吉村の眼差しはニューヨークの摩天楼などにも向けられる一方、ニューホープに残るコロニアル様式の民家や納屋に、日本の建築との親和性を発見します。日米開戦直前の1941年7月、吉村は日本へ向かう最後の引き揚げ船・龍田丸の船上で、バイオリニストの大村多喜子と出会い、のちに結婚します。

霊南坂の自邸

アントニン・レーモンド｜1924｜東京都港区

1919年に帝国ホテル建設のためフランク・ロイド・ライトと共に来日したアントニン・レーモンドは、妻ノエミと共に1921年に独立。長らくライトの影響を受けていたレーモンドは、この自邸の設計の時期から、打ち放しコンクリートを本格的に用い始め、独自の道を歩むようになる。

中庭をコの字に取り囲むプランや、L字に大きく開口が取られた1階居間が特徴的なこの家を、駐日フランス大使であり作家、詩人のポール・クローデルは、「呼吸する衣装」と評した。

吉村は、雑誌に掲載されていたこの家の模型写真に魅かれ、都内を探し歩き辿りついた。その後レーモンドと知り合いだった叔母の紹介で食事をし「事務所に遊びに来ないか」と誘われたことをきっかけに、レーモンド事務所で働くことになる。

外観（所蔵：株式会社北澤建築設計事務所）

トレッドソン氏別荘

アントニン・レーモンド（担当：吉村順三）｜1931｜栃木県日光市

吉村がレーモンド事務所で最初に担当した作品。居間には暖炉が設置され、南東の隅部はL字に開口部が取られている。居間と並ぶ2つの個室は引き戸によって仕切られており、すべての引き戸を開放すると、西から東に貫く大空間となる。レーモンドの作品集には「ロマンチックな環境に建てられたロマンチックな週末別荘、自由な平面計画と間仕切り壁の開放性とは、比較的狭小の空間にゆとりを興へ、同時に比較的多数の泊客を収容し得る。」と紹介されている。

外観（出典：『アントニン レイモンド作品集 1920-1935』城南書院, 1935）

軽井沢 夏の家

アントニン・レーモンド｜1933｜長野県北佐久郡（現在は移築）

1　2
3

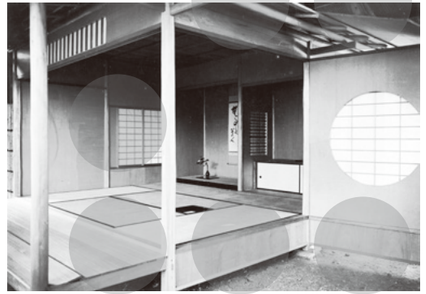
1　外観　移築前にはプールが設けられていた
2　コンクリート造の基壇の上に木造部が建つ
3　夏の間はここに事務所を構え、仕事をした
（全て所蔵：株式会社北澤建築設計事務所）

レーモンドの別荘兼事務所として建築され、夏の間は所員と共にここで仕事を行った。

移築前は、木造部の下に鉄筋コンクリートの基壇があり、せり出した木造部の下はピロティ状になっていた。吉村はこの部分を気に入っており、後の軽井沢の山荘（吉村別荘）にもその影響が見える。栗の柱と杉の梁を組み合わせた丸太材の構造を自然のまま活かした内装で、横方向の連続窓が特徴的な1階の食堂と、吉村や前川國男らが図面を描いていた2階の作業室は折り返しのスロープでつながれている。令和5年（2023年）重要文化財に指定された。

日本文化会館 茶室

Tea House of Japan Institute｜アントニン・レーモンド（担当：吉村順三）｜1939｜アメリカ・ニューヨーク



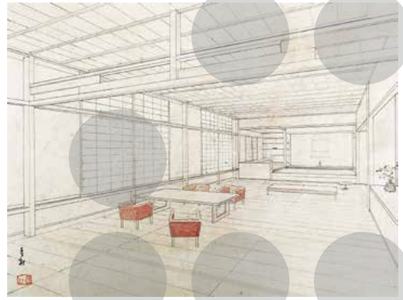
1　2

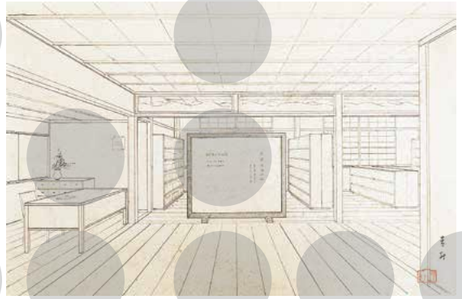
1　京都での仮組の様子（所蔵：ペンシルベニア大学建築アーカイブ）
2　1952年ブルックリン美術館「日本の民芸 Japanese Folk Art」展での展示（Image: PHO_E1952i001.jpg Brooklyn Museum photograph, 1952）

NYロックフェラーセンター国際ビル36階に開設された日本文化会館の室内に設置された茶室。レーモンドが依頼を受け、吉村が担当となった。吉村は日本で部材の準備をし、6畳間分の部材をアメリカに送り、自身も渡米し現地で組み立てを監督した。1939年10月末に完成したが、日米開戦により1941年12月に閉鎖された。のちに1952年、ブルックリン美術館の展覧会で展示されている。

斎藤博駐米大使記念図書室 計画案

Plan of Saito Memorial Room｜アントニン・レーモンド（担当：吉村順三）｜1940｜アメリカ・ワシントンDC｜実現せず





1　2

1,2　斎藤博駐米大使記念図書室 計画案パース（1940年／全て所蔵：株式会社北澤建築設計事務所）

日米の親善に尽くしながら1939年に亡くなった斎藤博駐米大使を記念して日本政府から寄贈された、日本と中国の奇書のコレクションを納める特別室を、ワシントンの米国議会図書館に設置する計画。斎藤の後任の堀内大使から依頼を受けたレーモンドが東京の吉村に作図と事前見積りを託した。その後吉村は渡米し、米国議会図書館日本課長だった坂西志保とやりとりを重ねたが、開戦の気配が近づき、中止となった。

吉村順三のアメリカ：坂西志保への書簡から

田中厚子（建築史家）

1940年5月、吉村はレーモンド事務所の二つの仕事－日本文化会館の「茶室」と、斎藤博駐米大使記念図書室計画案を担当するために渡米した。NYロックフェラーセンター国際ビル36階の日本文化会館は、悪化する日米関係を憂い「無知による日本への悪感情に対処するため」1939年3月に開設された[1]。その室内に置く茶室を吉村が日本で準備し、現場で組み立てを監督、10月末に完成したが、およそ1年後の日米開戦で閉鎖された[2]。

もう一つは日米関係改善に尽力する最中に病に倒れ、亡くなった駐米特命全権大使斎藤博の名を冠した図書室を米国議会図書館内につくる計画である[3]。依頼されたレーモンドは吉村に渡米を促した[4]。ニューホープに落ち着いた吉村は、議会図書館日本課長の坂西志保に「この意義ある仕事に携わることが出来まして、この上なく光栄に存じております。…先月末到着以来直ちに設計を進めております。…いかにして真の日本の精神を美しさを表現いたすべきかと微力を盡しております。」（1940/6/12）と書いている[5]。

以後、「図面にかかって居ります」（7/14）、「大体今度の案のデザインを決めることが出来ました」（7/20）、「漸く図面を仕上げることが出来ました」（8/1）、「青焼一通り大使館に送りました」（8/4）と経過報告をしながら、日常生活や印象を記した手紙を送り続けた。なかには「ボストンは街の様子が何となく落ち着いて人間が住むのに良い大きさを持っている」（9/23）、「メトロポリタンも四日程参りましたが、色々と教えられる事が多くニューヨークがその点ではつくづくうらやましく思いました」（1941/2/1）などの記述があり、24通の手紙はどれも誠実で温かい人柄が滲み出ていて、胸を打たれる。

しかし日米関係の悪化により計画自体が頓挫し、「両国にとって一つの絶好のチャンスを失った様な気がいたします。…しかし我々のこの基礎工事は必ず他日の役にたつことと考えます」[6]と吉村は記した。41年7月にワシントンで坂西に挨拶してシカゴに向かい、飛行機でサンフランシスコに移動、1週間以上待機して龍田丸に乗船し8月17日に帰国した。

帰国後の手紙には「一年余りのアメリカの生活は大変貴い経験でした。自分の今までの狭い生活に対する考え方が広げられただけでも非常に嬉しく思っています」（1941/10/13）と書かれている。特にこの二つの計画は、戦後MoMAに建設された松風荘の設計の助走となった。庭との関係に重点を置いた松風荘は、室内で日本建築をどう見せるかに苦心した吉村が、力強く日本を表現した作品である。

1　"Good-Will Institute Set Up Here by Japan", *NY Times*, Mar 29, 1939.
2　William Whitaker氏のご教示によれば、この茶室はブルックリン美術館の「日本の民芸展」（1952年）に展示された。
3　「図書館に斎藤室」読売新聞、1939年1月2日。
4　1940年1月17日付レーモンドから吉村宛書簡（ペンシルベニア大学建築アーカイブ、レーモンドコレクション）。
5　米国議会図書館の中原まり氏より坂西志保資料の存在をご教示いただいた。以降（　）内は日付。
6　坂西宛日付不明の書簡。

Junzō Yoshimura in America: Letters to Shiho Sakanishi

Atsuko Tanaka (Architectural historian)

In May 1940, Yoshimura went to the U.S. to oversee two projects for the Raymond office. The first was a "tea room" in the Japan Institute, and the second was a plan for a memorial library for U.S. Ambassador to Japan Hiroshi Saito. The Japan Institute was established in March 1939 on the 36th floor of the International Building at Rockefeller Center in New York City. The facility was created "to help in overcoming bad feelings toward Japan due to ignorance" in the face of worsening Japan-U.S. relations [1]. Yoshimura prepared and sent 25 cases of materials to the U.S. He then went to the U.S. before the materials arrived and supervised the assembly on site, overseeing its completion at the end of October. Unfortunately, it was closed in December 1941 due to the outbreak of the war between the U.S. and Japan [2].

The second project was to build a library room in the U.S. Library of Congress to commemorate the first anniversary of the death of Hiroshi Saito, Ambassador Extraordinary and Plenipotentiary to the United States, who became ill and passed away in 1939 while working to improve Japan-U.S. relations [3]. Upon receiving the design request, Raymond wrote to Yoshimura urging him to come to the U.S.[4]. Soon after settling in at the Raymond Farm in New Hope, Yoshimura sent a letter to Shiho Sakanishi, who was then Director of the Japan Division of the Library of Congress, in which he wrote, "It is a great honor for me to be involved in this significant work ... I have been working on the design since my arrival at the end of last month ... I am doing what little I can to express the true spirit and beauty of Japan." (1940/6/12)[5]

He would continue to send letters to Sakanishi describing his daily life and impressions of the city while reporting on his progress – "I'm working on the drawings" (7/14), "I'm close to finalizing the design of the proposal" (7/20), "I've finally finished the drawings" (8/1), "I sent all the blueprints to the embassy" (8/4), etc. The 24 letters, which include statements such as "The city of Boston has a calmness about it and is a good size for human habitation" (9/23) and "I visited the Metropolitan Museum for four days and learned many things, and was quite envious of New York in that respect" (1941/2/1), all exude an honest, sincere and warm personality that is touching.

However, the project itself was abandoned due to the further deterioration of Japan-U.S. relations. "I feel that a great opportunity for both countries has been lost," Yoshimura wrote, "But I am sure that our foundation work will prove useful some day."[6] Having decided to return to Japan, Yoshimura went to Chicago after meeting Sakanishi in Washington in July 1941, then flew to San Francisco, where he waited for more than a week before boarding the Tatsuta Maru and returning to Japan on August 17, 1941.

After returning to Japan, he wrote in a letter, "The year or so I spent living in the United States was a very valuable experience. I am very glad that I was able to broaden my narrow outlook on life" (1941/10/13). His experience with the above two projects in particular served as a prelude for his design of Shofuso (1954), which was built after the war at the Museum of Modern Art in New York. Shofuso, with its emphasis on the relationship with the garden, is a powerful expression of Japan by Yoshimura, who struggled to find a way to present Japanese architecture in an indoor setting.

1　"Good-Will Institute Set Up Here by Japan", *NY Times*, March 29, 1939.
2　According to William Whitaker, the tea room was later exhibited at the Brooklyn Museum of Art's "Japanese Folk Art Exhibition" (1952).
3　Saito Room in Library", *Yomiuri Shimbun*, January 2, 1939.
4　Letter from Raymond to Yoshimura, dated January 17, 1940 (University of Pennsylvania Architecture Archive, Raymond Collection).
5　Mari Nakahara at the Library of Congress provided information on the Sakanishi Shiho archives.
6　Undated letter to Sakanishi.

レーモンド・ファーム

New Hope Farm ｜ アントニン・レーモンド ｜ 1939 ｜ アメリカ・ペンシルベニア

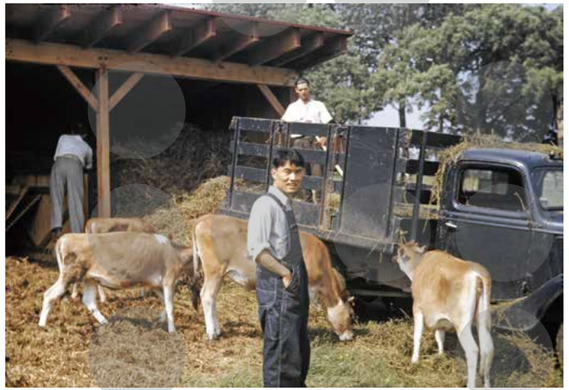
戦争の気配が少しずつ近づいてきた 1937 年にレーモンドはアメリカに帰国。1939 年、ニューホープに 18 世紀のクエーカー教徒の農場と農家を買取り自宅兼事務所とした。石造りの母屋を改装し、南面 1 階の居間に天井から床まで引き違いのガラス戸が配された。吹き抜け上部にあしらった襖と障子は、日本に残した資産を元手に京都に注文して作り、吉村が輸出手続きをした。

1
2 3 4

1　レーモンド・ファーム（撮影：シャーロット・レーモンド）
2　南側外観
3　1 階居間 障子などの日本的意匠が見られる
4　ノエミ・レーモンドと吉村（1940 年頃）
（全て所蔵：レーモンド・ファーム・センター）

吉村の眼

吉村は滞米中、レーモンド・ファームの様子や訪れた先々に残るコロニアル建築、また仕事で訪れたニューヨークの風景などを自らのカメラで撮影した。



1　2
3　4　5
6　7　8

1, 2　吉村のカメラで撮影されたスナップ写真（ニューホープ／ 1940 年頃）
3, 4, 5　吉村撮影のスナップ写真（ニューヨーク／ 1940 年頃）
6, 7, 8　吉村撮影のスナップ写真 コロニアル建築（1940 年頃）
（全て所蔵：吉村設計事務所）

3章

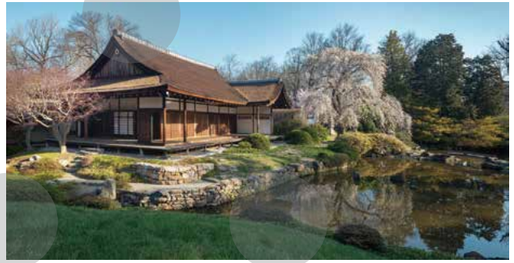
吉村順三が紹介した日本

〈戦後アメリカ〉
日本をひらく

真珠湾攻撃により太平洋戦争が開戦した1941年12月8日に、吉村は事務所を開設し独立します。戦後、1950年代にはアメリカで高まる日本への関心に応えるように、ニューヨーク近代美術館で開催された「House in the Garden」シリーズの企画に招聘され、書院造の日本建築「松風荘」を美術館中庭に展示します。この展示はアメリカで大きな話題を呼び、ロックフェラーⅢ世との交流が生まれ、のちの「ジャパン・ソサエティー」、「ポカンティコヒルの家」の設計へとつながりました。また「モテル・オン・ザ・マウンテン」の食堂棟では、日本建築の要素を取り入れ話題となり、アメリカに於いて吉村順三の仕事がさらに知れ渡ることとなります。

松風荘

Shofu-So (The Japanese House and Garden) | 吉村順三 | 1954 | アメリカ・ニューヨーク



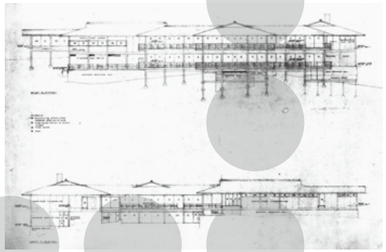
ニューヨーク近代美術館（MoMA）の中庭に、モダンリビングの啓蒙を狙いとして、モダニズムの住宅を2年間ずつ展示するシリーズ、「House in the Garden」の第3回企画として計画された。来日し、日本建築を調査したMoMAのキュレーター、アーサー・ドレクスラーの意向により、モダニズム建築への近似を示す日本の伝統的な住宅のモチーフとして、書院造りの光浄院客殿が選ばれた。吉村はただの「写し」に留めることなく、建物と庭の連続性の強調、より装飾性を排したディテールの採用等、自らの意図を反映している。部材は日本から船で運び、宮大工の伊藤平佐衛門、庭園は佐野旦斎が協力した。宮大工による組み立ての様子は、『LIFE』（1954年8月23日号）で大きく掲載された。現在は、フェアマウント・パークに移築されている。

1 3
2 4
5

1 フェアマウント・パークに移築された松風荘　大きくとられた濡れ縁が日本庭園とつながる（© Elizabeth Felicella）
2 フェアマウント・パークに建つ移築後の松風荘と同様、移築前も濡れ縁から池が臨めた（© Elizabeth Felicella）
3 内観 移築前の襖絵は、吉村と交流があった東山魁夷によるもの（© Ezra Stoller / Esto）
4 建設現場で屋根の上に立つ吉村（© 2023 Digital image, The Museum of Modern Art, New York / Scala, Florence）
5 吉村順三による松風荘のためのスケッチ（所蔵：吉村設計事務所）

モテル・オン・ザ・マウンテン 食堂棟

Motel on the Mountain | 吉村順三 | 1956 | アメリカ・ニューヨーク



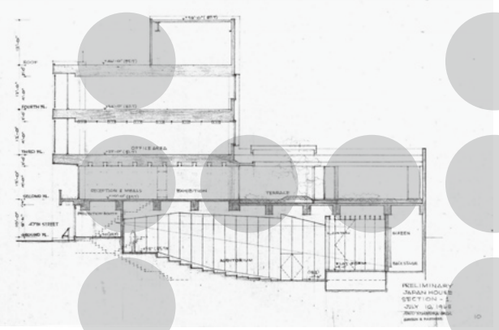
マンハッタンから高速道路で1時間ほどの場所にある、花崗岩の岩山の頂きに建てられたホテル。宿泊棟はハーウェル・ハミルトン・ハリスの設計による。建物全体が山頂の人工池を中心に等高線に沿って環を描くように配置され、各室がプライベートな眺望を持つように意図されている。レストラン棟を吉村が設計した。眺望の開けた一角に張り出し、清水寺のような懸造りになっている。コの字形の平面が中庭の池を囲い、上階の渡り廊下が中庭の地形に合わせて回遊できる。『LIFE』（1957年8月12日号）に4ページに渡って掲載され、注目を浴びた。当時NYで暮らしていた猪熊弦一郎夫妻は知人を紹介するために度々モテルを訪れている。

1 2
3 4 5

1 東側外観　崖の上に張り出したテラスと大きな開口部から、マンハッタンが遠望できる（© Andreas Feininger / The LIFE Picture Collection）
2 モテル・オン・ザ・マウンテンの眺め（© Andreas Feininger / The LIFE Picture Collection）
3 モテル・オン・ザ・マウンテンの模型を眺める吉村と猪熊の妻・文子（撮影：猪熊弦一郎／所蔵：丸亀市猪熊弦一郎現代美術館）
4 内装には障子が使われた（撮影：猪熊弦一郎／所蔵：丸亀市猪熊弦一郎現代美術館）
5 東側、西側、立面図（所蔵：東京藝術大学）

ジャパン・ソサエティー

Japan Society｜吉村順三｜1971｜アメリカ・ニューヨーク



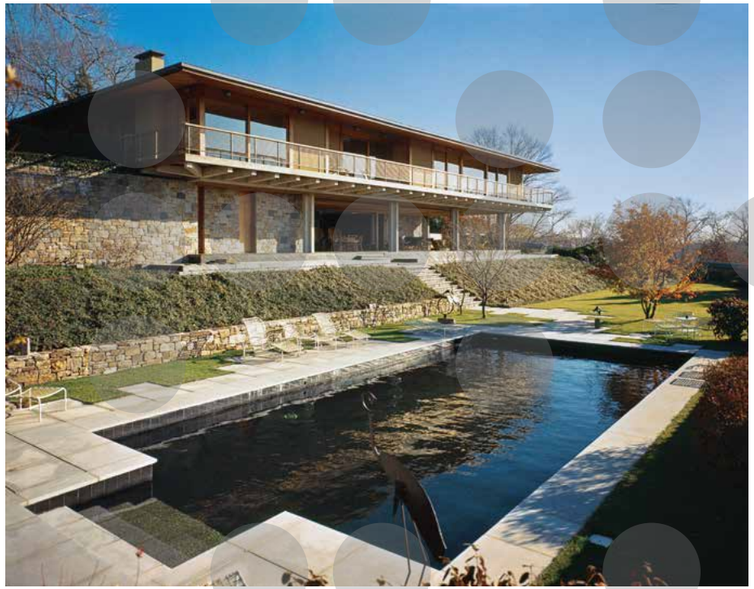
日米両国の相互理解と学術的交流を目的とする Japan Society の本部で、ニューヨーク市の中心街、国連ビルのすぐ近くに建てられた。高層ビルがひしめくマンハッタンにあって、4 階建てと小規模な建物ではあるが、黒色のプレキャストコンクリートのファサードや、アルミの簾、鉄製の犬矢来など繊細なデザインが日本らしさを醸し出し、独特の存在感を発揮している。平面構成は簡潔だが、連続する屋内外の 2 つの庭を中心に展示室や、会議室、事務室、ロビーから地下のオーディトリアムへの空間が緊密に連続している。

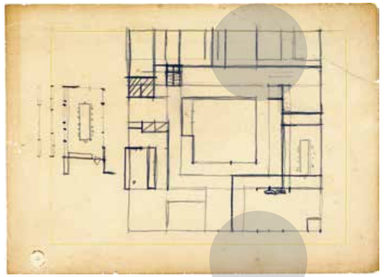
1　2
3
4

1　水盤が配された 1 階のロビーの屋内庭園には、天窓より自然光が降り注ぐ（© Japan Society）
2　外観（© Japan Society）
3　外観パース（© Japan Society）
4　断面図（所蔵：東京藝術大学）

ポカンティコヒルの家

Residence at Pocantico Hills｜吉村順三｜1974｜アメリカ・ニューヨーク





ニューヨーク市郊外のポカンティコヒルの丘の斜面に立つこの住宅は、日本の木造住宅の良さを生かしたコンパクトで住みよい住宅をという施主の希望を簡潔なロの字の平面で実現している。中庭に面したギャラリーおよび居間・食堂・ホールの間仕切りとなる襖や障子は、すべて躯体の中に納めるように設計され、室内空間のフレキシビリティと、中庭との一体感、広大な自然を見下ろす眺望を獲得している。この邸宅内の家具 220 点余りは、レーモンド事務所で同僚だったジョージ・ナカシマが手掛けた。

1　2
3

1　プール越しの外観　ピロティにはガラス戸が設けられ必要に応じて閉めることができる（© 新建築社 写真部）
2　食堂から、奥に回廊状のギャラリーを望む　家具はジョージ・ナカシマによるもの（© 新建築社 写真部）
3　吉村による計画案スケッチ（1968–1969 年頃）中庭をロの字に囲むプラン（益子義弘蔵）

相関図 アメリカと日本

夫婦　兄弟・子ども・親族　師弟関係　＊出典の表記がない画像は全て提供：吉村設計事務所

レーモンド事務所

フランク・ロイド・ライト
1867–1959

建築家。1913年から帝国ホテルの設計のため度々日本を訪れ、1919年には後に吉村の師となるアントニン・レーモンドらを伴って来日した。幼少期の吉村は、帝国ホテルに連れていかれ食事をした際に、建物の素晴らしさに心ひかれたという。

アントニン・レーモンド
1888–1976

建築家。ボヘミア（現チェコ）で生まれる。1919年に帝国ホテル設計のため、フランク・ロイド・ライトの助手として来日。1922年に独立し、レーモンド事務所を開設した。霊南坂の自邸を訪ねてきた吉村を事務所に迎える。

写真撮影：
渡辺義雄／『建築』1961年10月号

［関連作品］
霊南坂の自邸
トレッドソン氏別荘
軽井沢夏の家
レーモンド・ファーム
斎藤博駐米大使記念図書室
モントークポイントの家

ノエミ・レーモンド
1889–1980

建築家。フランスのカンヌで生まれ、ジュネーヴで育つ。アントニンとともに、1919年に来日。吉村の妻・多喜子に、自身が受けたマリー・シャセルバンのメソードを伝えたことが、ソルフェージスクールへとつながる。

「ぼくはレーモンドから日本の建築のいいところを教わったけれども、ぼくのほうからも日本建築のいいところを教えたことになるんだろうと思うんだ。」

『吉村順三を囲んで』吉村順三＋宮脇檀＋六角鬼丈＋藤森照信＋中村好文、TOTO出版、1992年

前列中央にノエミ・レーモンド、左後ろにアントニン・レーモンド、右に吉村順三、左に前川國男、最後列中央にジョージ・ナカシマ（個人蔵）

杉山雅則
1904–1999

レーモンド事務所の番頭格。レーモンドが1939年に離日し、1941年に事務所を閉鎖したため、三菱地所に身を寄せ、戦後もそちらに残った。吉村が渡米した際には、杉山と手紙や電報のやりとりを重ねた。

写真：杉山雅則旧蔵資料

前川國男
1905–1986

1928年、東京帝国大学卒業後、パリのル・コルビュジエの事務所に入所。1930年に帰国後、アントニン・レーモンドの事務所に入所。1935年、自らの事務所を開設。後に新制作派協会 建築部でも吉村と動きを共にする。国際文化会館を吉村、坂倉と共同設計した。

写真提供：国際文化会館

［関連作品］
国際文化会館

ジョージ・ナカシマ
1905–1990

1934年にレーモンド事務所に入所、吉村とは共に京都の寺社仏閣を見に行く仲だった。1939年、前川國男事務所に入所。その後、渡米するも日系人施設に強制収容。そこで知り合った日本人大工に木工を学び戦後、ニューホープに家具工房を設立。ポカンティコヒルの家の家具、220点余を製作。

［関連作品］
ポカンティコヒルの家
ジャパン・ソサエティー

マリー・シャセルバン
1836–1914

ピアニスト、歌手。1895–1912年にジュネーブ音楽院で子供にソルフェージを教える。そのメソードはスイス、その他のヨーロッパで高く評価され多くの音楽教師を輩出。簡単な絵や特別仕立ての鍵盤を用いて遊び心のある方法を提供した。

亀倉雄策
1915–1997

グラフィックデザイナー。ソルフェージスクールのロゴやパンフレットを手がける。吉村は亀倉の山中湖の別荘も設計している。

家族／ソルフェージスクール

大村多喜子
1916–2012

アメリカ・ジュリアード音楽院初の日本人留学生となったバイオリニスト。帰国する際に乗船した龍田丸で、吉村と出会い、1944年に結婚。後に、ソルフェージスクールを創設する。

吉村と、隆子・多喜子（個人蔵）

吉村隆子
チェリスト。ソルフェージスクール現理事長。吉村と多喜子の娘。

［関連作品］
軽井沢の山荘（吉村別荘）
ソルフェージスクール
青山タワー／タワーホール

青山タワーホールでの発表会の様子。後ろから吉村が見守っている。（所蔵：ソルフェージスクール）

吉村順三
1908–1997

「山本先生は当時、『住宅』誌上で健筆を振るっており、…私はすっかり感心してしまって、その後の私の住宅観の中にこれはずっと生きているように思ってます。」

『拙先生絵日記』山本拙郎、住まいの図書館出版局、1993年

山本拙郎
1890–1944

住宅建築家。吉村が愛読していた『住宅』（住宅改良会）主筆として、住宅改良への啓蒙、和洋折衷の住宅スタイルの浸透に大きな役割を果たした。吉村にとって、山本は最初に好きになった建築家であった。吉村は旧制中学在学時に『住宅』主催のコンペに応募し、入選している。

写真：個人蔵

東京美術学校（東京藝術大学）

岡田信一郎
1883–1932

東京大学建築学科卒。「洋式建築の名手」とされる。東京美術学校、早稲田大学で教鞭をとり、明治生命館などを手がけた。吉村が東京美術学校を志したのは、雑誌に載った岡田の寄稿文がきっかけだった。

大澤三之助
1867–1945

建築家。東京帝国大学で辰野金吾に学ぶ。東京美術学校で吉村に家具史を教えた。吉村がルネサンス期の家具のスケッチなどを書き留めた大澤の講義ノートが残っている。

村田政真
1906–1987

建築家。東京美術学校の2学年先輩。後に駒沢オリンピック公園総合運動場陸上競技場などを設計。息子の村田博が青山タワーホールの緞帳をデザインした。

水谷武彦
1898–1969

バウハウスに留学した初めての日本人。カンディンスキーや、マルセル・ブロイヤーに学ぶ。1931年より、東京美術学校で教鞭をとる。吉村は水谷のバウハウス的教育に大きな影響を受けた。

東山魁夷
1908–1999

画家。東京美術学校の同窓生。後に、東山は吉村が設計した松風荘に、障壁画を制作。また、吉村が基本設計を任された皇居新宮殿の「朝明けの潮」も手掛けた。吉村は東山の自邸も設計している。

［関連作品］
松風荘

田中一村
1908–1977

画家。東京美術学校の同窓生（田中はすぐに退学）。吉村と田中は、小学生の時に日伊友好親善を目的としたコンクールで、共に選出されている。

斎藤博駐米大使記念図書室計画案

斎藤 博
1886–1939

1933年より駐米全権特命大使に着任。悪化する日米関係の中で関係改善に奔走したが、体調を崩したため1938年に辞任、翌年に逝去。極めて異例なこととして、アメリカは日米友好に尽くした斎藤の死を悼み、遺骨を巡洋艦で日本まで護送した。

写真：個人蔵

堀内謙介
1886–1979

斎藤の後任として1938年から1940年まで駐米大使を務める。在任中、斎藤大使記念図書室の設計をレーモンドに依頼し、吉村が担当した。1944年の吉村と大村多喜子の結婚式では仲人を務めた。

吉村と大村多喜子の結婚式（個人蔵）

坂西志保
1896–1976

1922年にアメリカへ留学、現地の大学で助教授などを務めた後、アメリカ議会図書館で日本文化に関する書籍・資料の要職に就く。在任中、斎藤大使記念図書室の設計にあたり、担当者として吉村と交流。1942年に帰国。戦後は参議院外務専門調査員などを務める傍ら多くの著書・訳書を著した。

写真：国立国会図書館「近代日本人の肖像」

新制作派協会

「弦ちゃん、ニューヨークへ行ったら、君が本当に好きなものがいっぱいあるよ」

『私の履歴書』猪熊弦一郎、丸亀市猪熊弦一郎現代美術館、2003年

猪熊弦一郎
1902–1993

画家。1949年に新制作派協会に建築部を立ち上げた際、吉村に声をかけた。1955年から約20年間、ニューヨークに居を移したが、吉村の後押しも大きかったという。自宅の設計を吉村に依頼した。

写真：個人蔵

［関連作品］
猪熊邸
日本航空ニューヨーク支店 内装
高島屋ニューヨーク支店 内装

脇田 和
1908–2005

画家。新制作派協会のメンバー。藝大の同僚でもある吉村に、別荘の設計を依頼した。

［関連作品］
脇田和アトリエ山荘

［建築部］
谷口吉郎、山口文象、池辺 陽、丹下健三、岡田哲郎、前川國男

猪熊が仲間と立ち上げた美術団体＜新制作派協会＞に1949年、吉村ら7名の建築家を招き、建築部を設けた。

前田多門
1884–1962

内務省、朝日新聞を経て、1938年にニューヨークの日本文化会館館長に就任。文化会館内に設けた茶室を吉村が手がけた。

［関連作品］
日本文化会館 茶室

片岡文子
1902–1988

猪熊の妻。ニューヨークの猪熊邸は「フミ・レストラン」と呼ばれ、多くの人が夫妻を訪ね、料理上手で知られた文子の料理を囲んだ。吉村が設計した日本の猪熊邸は、それを受けてオープンキッチンになっている。

［関連作品］
猪熊邸

片岡葉子
1951–

大澤悟郎
1951–

猪熊邸継承者。祖父の大澤三之助は、東京美術学校で吉村に家具史を教えた。

大澤三之助
1867–1945

園田高弘・春子
1928–2004 / 1932–

ピアニスト。高弘の父の友人である小沢弘が東京藝術大学で教授を務めており、吉村の同僚だったことから、グランドピアノ2台が置ける新居の設計を依頼した。

写真：個人蔵

［関連作品］
園田高弘邸（現・伊藤邸）

国際文化会館

坂倉準三
1901–1969

建築家。前川國男の紹介で、フランスのル・コルビュジエの事務所に入所。パリ万国博覧会で日本館を手がける。国際文化会館の設計では、吉村・前川と協働した。

写真提供：国際文化会館

前川國男
1905–1986

松本重治
1899–1989

ジャーナリスト。国際文化会館創設者のひとり。1929年に京都で開かれた会議でジョン・D・ロックフェラーⅢ世と知り合う。戦後、対日講和特使団の一員として来日したロックフェラーと再会し、国際文化会館の設立へつながった。その後も協力関係は続き、ニューヨークのジャパン・ソサエティーの復興にも尽力した。

写真提供：国際文化会館

［関連作品］
ジャパン・ソサエティー

ハーウェル・ハミルトン・ハリス
1903–1990

カリフォルニア出身の建築家。1930年代に日本建築の影響を受けた住宅を設計した。モテル・オン・ザ・マウンテンでは、食堂棟を吉村が、宿泊棟をハリスが設計した。

［関連作品］
モテル・オン・ザ・マウンテン 食堂棟

矢代幸雄
1890–1975

美術史家。猪熊弦一郎が矢代にモテル・オン・ザ・マウンテンを案内しており、その時の8mmフィルムが残っている。

［関連作品］
モテル・オン・ザ・マウンテン 食堂棟

松風荘

［考証］
関野 克
［設計協力］
伊藤要太郎
［施工担当］
伊藤平佐衛門
［庭園担当］
佐野且斎

石元泰博
1921–2012

写真家。MoMAの写真部長スタイケンに依頼され、15年暮らしたアメリカから帰国後の1953年3月、吉村、ドレクスラーと共に上賀茂神社、京都御所、桂離宮、松風荘のモチーフになった光浄院客殿などを実見・調査した。

アーサー・ドレクスラー
1925–1987

MoMAのキュレーター。1953年2月から3月にかけて来日し、調査をした結果、書院造の国宝「園城寺光浄院客殿」（1601年）を吉村の手によって再設計し、新築することを決めた。

ジョン・D・ロックフェラーⅢ世
1906–1978

19世紀末から石油業で財を成したロックフェラー家の三代目。1952年にロックフェラー財団理事長、ジャパン・ソサエティー会長に選任。戦前にも来日経験があり、日本文化への関心が高かったジョンは、対日講和特使団の担当者として戦後に来日。MoMAでの日本家屋の展示と、国際文化会館の設立を提案した。

写真提供：国際文化会館

［関連作品］
ジャパン・ソサエティー

ネルソン・ロックフェラー
1908–1979

ジョン・D・ロックフェラーⅢ世の弟。松風荘の建築にあたっては、兄ジョンの求めで資金援助も行っている。ポカンティコヒルの家を吉村に依頼した時は、アメリカ合衆国副大統領だった。

［関連作品］
ポカンティコヒルの家

4章

吉村順三の
インターナショナル

〈戦後日本〉
音楽とともに…

戦後の日本で、吉村は自身の経験に根ざしたインターナショナルな空間をつくりあげます。「国際文化会館」では、前川國男、坂倉準三とともに日本を代表する建築家として設計に臨み、日本建築の美の要素を国際的なスタイルに昇華させました。一方で、自身がアメリカで体験した自由で平等な生活様式と、音楽や絵画などの芸術を日本の住まいに取り入れ、さらに芸術文化のための空間が点在する豊かな都市環境を目指しました。「青山タワービル/タワーホール」は、外苑前の緑に開かれた音楽ホールと、人々が行き交うオープンスペースとしてのピロティを持つ斬新なオフィスビルでした。妻・大村多喜子が創設した音楽教室「ソルフェージスクール」やピアニスト・園田高弘夫妻の住宅には、多様な使い方を可能にする空間の工夫が随所にちりばめられています。また晩年の作品「八ヶ岳高原音楽堂」は、最高峰の音響をもつホールとして、今でも多くの音楽会が行われています。

園田高弘邸（現・伊藤邸）

吉村順三｜1955｜東京都目黒区

ピアニスト・園田高弘とその妻・春子の住まいとして「グランドピアノが2台置ける」ことを条件に設計された住宅。開放的な吹き抜け部分と対照的に、天井の低い居間は、角に配した窓から見える庭の景色や風通しが楽しめ、コーナーには暖炉が配置されるなど様々な空間が実現している。造りつけの収納や可動式の家具など細やかな工夫で、海外からも訪れる夫妻の来客に対応できるよう計画された。戦後間もない時期、壁の中に綿を詰めるなど手に入る材料で防音にも配慮し、吹き抜けを介して、家のどこからもピアノの音が聴こえた。現在は新しいオーナーのもと、住宅遺産トラストが管理している。

1　3
2

1　内観　吹き抜けを介して1階と2階がゆるやかにつながる
2　内観　居間には暖炉が配された
3　外観
（全て撮影：市川靖史）

国際文化会館

前川國男、坂倉準三、吉村順三｜1955｜東京都港区

1955年、前川國男、坂倉準三、吉村の三氏の共同設計により現在の本館（旧館）部分が完成した。また本館に隣接した、常勤役員2名のための付属住宅（現存せず）を吉村が設計を担当した。中央の女中室に東西方向の水平耐力を集中させることで、1階居室を壁のない構成とし、パーティなど公私のさまざまな生活場面に対応するよう計画されている。1958年には、吉村が食堂を増築した。

外観　もともとの敷地にあった日本庭園を生かす形で設計が進められた。（写真提供：国際文化会館）

青山タワービル／タワーホール

吉村順三｜1969｜東京都港区

青山通りに面した高層オフィスビルと音楽ホールの複合施設として設計された。経済性の高さと街に開かれた公共性の両立をめざし、4本の柱で支えた開放的なピロティが通りを行く人の流れと内部を自然につなげている。タワーホールは220人収容の音楽ホールで、録音に使われるなど音響効果に定評があったが現存しない。道路から噴水のある池を挟んで人が直接出入りでき、搬入車両も舞台へ直に移動できるよう動線が工夫されていた。都市の中に生活文化の拠点を求めた吉村が自ら提案した、洗練された都市における芸術のための空間だった。

1　2

1　青山通り側外観（撮影：市川靖史）
2　ソルフェージスクール記録写真より　タワーホール前の噴水（所蔵：ソルフェージスクール）

ソルフェージスクール

吉村順三｜1967｜東京都豊島区

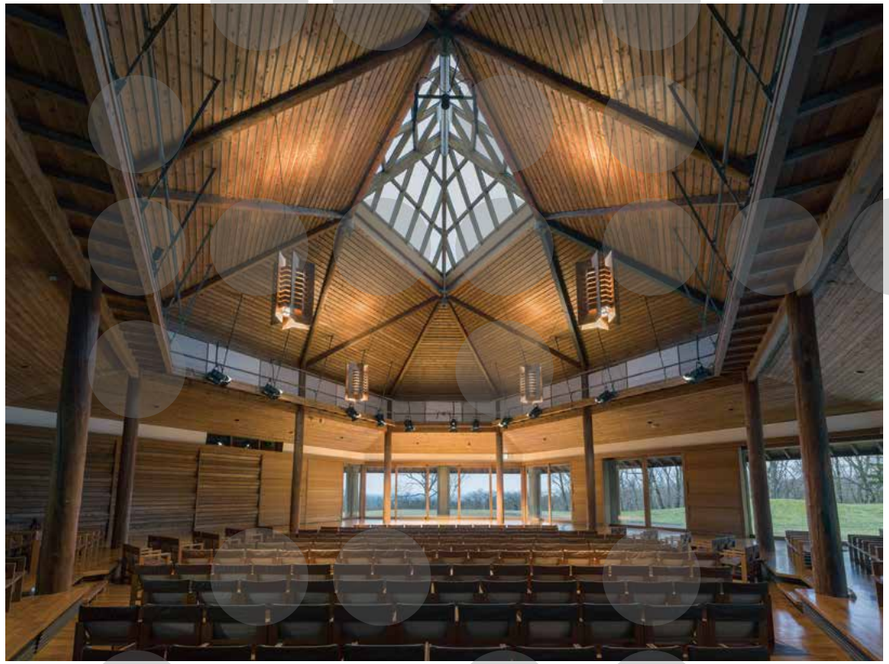
バイオリニストである妻・大村多喜子が創設した音楽教室のための施設。職員室や教室、楽器庫が入る1・2階は階高2.5mに低く抑え、3階は天井高最大4mの広々としたホールになっている。斜線規制に応じた勾配屋根が音響効果を生み、大きくはない敷地の中にも、子ども達がのびのびとリトミックを楽しみ、演奏会を行える開放的な空間が実現。吉村は受付カウンター、造り付けのベンチや収納などを手がけ、さらに教材「ソルフェージェット」のデザインやチラシ、広報誌のイラストなど様々な面で多喜子の活動に協力した。現在長女の吉村隆子が理事長を務め、多喜子が志した理想の音楽教育を吉村が形にした空間を、ほぼオリジナルの形のまま今に受け継いでいる。

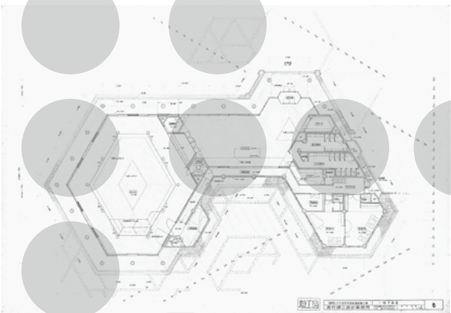
1　2
3　4

1　ホールの開口部の下には椅子が収納できる戸棚が設えられている（撮影：市川靖史）
2　外観　斜線規制による勾配屋根が、3階のホールの音響効果を生む（撮影：市川靖史）
3　ソルフェージスクールでのリトミックの様子（所蔵：ソルフェージスクール）
4　ノエミ・レーモンドから聞いた、マリー・シャセパンの音楽教育の話をもとに吉村が再現した教材「ソルフェージェット」（所蔵：ソルフェージスクール／撮影：光齋昇馬）

八ヶ岳高原音楽堂

吉村順三｜1988｜長野県南佐久郡





標高約1,600mの八ヶ岳東南麓に建つ六角形の木造の音楽ホール。地産材であるカラマツの小屋組に包まれたホールは大きな開口部を持ち、周囲の自然とともに音楽や講演会を楽しめる。平面は中央の平土間部分と一段高くなった回廊で構成され、アダプタブル・ステージとこの音楽堂のためにデザインされた折りたたみ椅子により、多目的に利用できる。残響時間調整用のパネルを組み込んだ木製スクリーンをガラス戸の前に引き出したり、キャットウォーク壁面を操作することで、催事に合わせてホールの音響特性を変化させることができる。

1
2　3

1　内観　客席は、吉村がデザインした、たためる椅子（撮影：市川靖史）
2　外観　連続した開口部は自然環境豊かな外部空間と内部空間を一体化させる（撮影：市川靖史）
3　一階平面図（所蔵：東京藝術大学）

5章

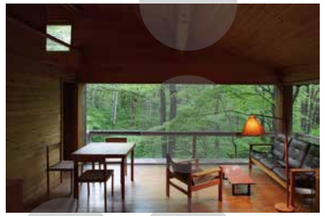
吉村順三の生活と藝術

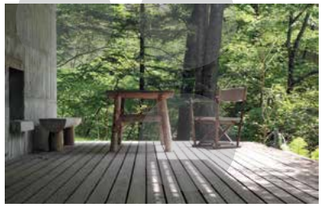
〈住まい手が受け継ぐもの〉
暮らしにひらく

吉村と国際的に活躍する芸術家・文化人との交流は多くの作品を生みます。吉村の勧めで1955年にニューヨークに渡った画家の猪熊弦一郎をはじめ、猪熊らと新制作派協会を立ち上げた画家の脇田和などの芸術家との交流から、暮らしの中に芸術が息づく数々の住宅が生まれました。それらの設計を通じ、吉村はアメリカで体験した生活様式と、日本の気候風土に根差した風通しの良さや庭との関係を融合させました。住宅それぞれに住まい手のライフスタイルに即した細やかな心遣いが織り込まれ、吉村の身体性に根付いた設計原理による住まいの空間は、時が経っても色あせない魅力となっています。

軽井沢の山荘（吉村別荘）

吉村順三｜1962｜長野県北佐久郡





吉村の自邸。鉄筋コンクリート造のボックスの上に7.2m角の正方形のコンクリートスラブを載せ、その上に木造の2階部分、片流れ屋根と屋上の露台が重なる。湿気を避けるため居住空間を持ち上げることで、周囲を囲む樹木との距離を身近にし、外に開かれた居間は宙に浮いているかのように感じられる。7.2m角の正方形の中を60cmのグリッドを用いて計画したコンパクトなプランに、商家の大戸を参考に扉を組み込んだ大きな引戸、立ったまま薪をくべられる風呂釜など、生活に根ざした工夫が織り込まれている。簡素ながらも心地よい豊かな空間が広がる、吉村の代表作の一つ。

1　2
3　4

1　外観　1階のコンクリートスラブは、湿気が多い軽井沢の気候から木造部を守る役割も持っている（撮影：古川泰造）
2　2階の開口部を開けると、森の中に浮いているような浮遊感がある（撮影：古川泰造）
3　テーブルを置き大人数で集まることもできる。杉板張りのテラス（撮影：古川泰造）
4　吉村順三直筆のスケッチ（1978年頃／所蔵：吉村設計事務所）

脇田和アトリエ山荘

吉村順三｜1970｜長野県北佐久郡

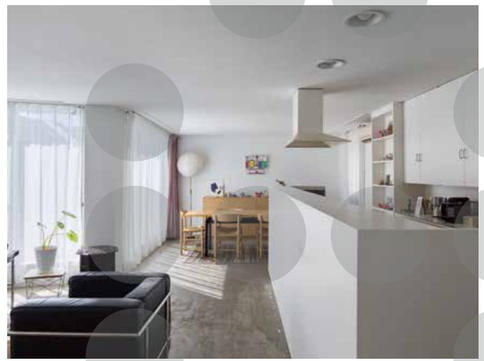
軽井沢の林の中に建てられた画家・脇田和のアトリエを備えた住居。湿気の多い地面を避けて1階部分を鉄筋コンクリートで持ち上げ、木造の2階を主階としている。庭のコブシの木を中心として「く」の字に曲がったプランにより、内外の空間が溶け込むように環境と一体となった。暖炉のある居間、コーナーに設えられたダイニング、渡り廊下で繋がれたアトリエなど、場面ごとに異なる居心地の良さを一続きに感じられる、豊かな内部空間となっている。

1
2　3

1　内観　カーペットの色は吉村が候補を挙げた中から脇田が選んだもの（撮影：古川泰造）
2　竣工当初の外装は無塗装だった（撮影：平尾寛）
3　平面図（所蔵：吉村設計事務所）

猪熊邸

吉村順三｜1971｜東京都大田区



ジャパン・ソサエティー設計のためニューヨークを訪れていた吉村に、画家・猪熊弦一郎と妻・文子が設計を依頼した住宅兼アトリエ。猪熊が植えた庭のオリーブの木（現在は切株横からヒコバエが育つ）を囲むように2階部分が張り出す特徴的なプランで、大きな窓を介して食堂から居間が見通せる。室内は壁がなく、当時まだ珍しいオープンキッチンを採用し、料理をしながら居間にいる人と会話ができる。アーリーアメリカンの住居に着想を得た「天井をあまり高くしない」という条件を受け、海外生活の長い夫妻に合わせた寸法設定、座ったときの目線の高さまで綿密に計画され、「スケールが本当に親しみやすい」と猪熊は語っていた。

1　4
2　3

1　居間内観
2　開口部は、庭のオリーブの木を囲むように設けられた
3　6mmの鉄板に最小限の持出梁で構成された軽やかな回り階段
4　外観
（全て撮影：市川靖史）

東西を受け入れる炎：吉村順三の暖炉

ケン・タダシ・オオシマ（ワシントン大学教授）

「火というのは、誰でも火を持つことをやってみたら、皆好きになりますね。これは昔からの人間の身体の中にある本能でしょう。一つの。実際に火を焚いて話しをしていると全然、雰囲気が楽しくなってきます。」[1]

1975年10月6日のニューヨークタイムズの一面に、昭和天皇と皇后が吉村順三設計のポカンティコヒルの家の暖炉の前に座る写真が掲載された[2]。記事によれば、天皇の訪問は吉村が1968年に基本設計した新宮殿に続く「公式なお披露目」であるとされる。施主のご夫妻は、「日本の木造住宅の利点を活かした住み心地の良い住まい」を求め、「家具の配置と各部屋のプロポーションが日常生活に対応するスケール感である」ことを望んでいた[3]。この東西交流において、天皇と皇后は黒漆のカップで施主夫妻と一緒にお茶を楽しんだが、それは緑茶ではなく米国の紅茶で、日米の菓子が添えられていた。吉村にとってこの空間は、日米の経験の中で培われた暖炉を中心とする住宅設計のプロセスの頂点を示すものだった。

おそらく子供の頃から火鉢や焚き火には馴染んでいたと思われるが、吉村が最初に暖炉を中心とした空間を経験したのはアントニン・レーモンドのもとで働いていた時期（1931–1941）だった。そのデザインは、日光にあるトレッドソン氏別荘（1931）の塔状の石の暖炉から、ニューヨーク州モントークポイントの家（1941–42）のリビングルームを形作る暖炉の壁まで多岐にわたる。吉村はレーモンドの1933年の軽井沢 夏の家で、暖炉を中心とした生活を実際に体験した。火の暖かさは、吉村が働くロフトの製図スペースにも届いただろうし、山々の景色が広がるリビングで寛いだこともあっただろう。その後吉村は渡米し、レーモンドのペンシルベニア州ニューホープのクエーカーの農家を改修した両側に暖炉があるリビング／製図スペースで、生活と仕事をした（1940–41）。暖炉は、その音、香り、姿を通して、空間を構造的かつ精神的に安定させる。吉村はこれら全ての教えを取り入れて、軽井沢の彼自身の山荘（1962）を設計し、基部に屋外の暖炉を、上部の居住スペースには室内の暖炉を設けた。吉村の山荘の断面スケッチは、彼が暖炉に焦点を当てたことを示している。

ポカンティコヒルの家の断面スケッチには、上階のリビングスペース／暖炉と傾斜した屋根、下階の屋外暖炉が描かれている。リビングルームの暖炉のデザインを洗練させるため、吉村は木製の囲いを付け、優雅な楕円形の煙突と高窓の光を受けた天井を統合した。対照的にリビングルームの隅には、日本の炉辺ともいえる床の間があり、その前にジョージ・ナカシマの家具が置かれている。吉村は公的・私的な空間のバランスをとりながら、主寝室の焦点となる暖炉や、優雅な曲線の銅製の煙突で形作られる家族室の暖炉もデザインした。暖炉と床の間という複数の焦点を与えることにより、吉村は生活空間の抑揚を生み出す「火」という初源的な要素を用いて、東西間の生活を構成したのだ。

1　吉村順三『火と水と木の詩』新潮社、2008
2　Lucinda Franks, “Hirohito samples American ways,” *New York Times*, October 6, 1975, 1.
3　Katayama Shinya, “Junzō Yoshimura,” *Japan Architect* 59, Autumn 2005, 106.

Yoshimura Junzō’s Enduring Flame between East and West

Ken Tadashi Oshima (Professor, University of Washington)

When it comes to fire, anyone who comes into its possession falls in love with it. This is an instinct that has existed in humans’ bodies since ancient times. For one thing, if one lights a fire, the atmosphere becomes totally enjoyable [1].

The October 6, 1975 front page of the *New York Times* featured the Showa Emperor and Empress sitting in front of the central fireplace of the residence at Pocantico Hill designed by Yoshimura Junzō[2]. The article noted the monarch’s visit was its “official inauguration,” which actually followed Yoshimura’s 1968 preliminary design for a new Imperial Palace. The clients had requested a “livable dwelling utilizing the merits of the Japanese timber house,” where “the arrangement of furniture and the proportions of each room provide a sense of scale that corresponds with daily life.”[3] In an exchange between East and West, the Emperor and Empress shared tea at the hearth in dark lacquered cups with the clients but the it was American black, not green and accompanied by both American and Japanese-style cookies. For Yoshimura, this space represented the apex of his residential design process centered on the hearth of the fireplace, evolving between his experiences between Japan and the United States that began with the fundamental element of fire.

While Yoshimura would have likely been drawn to *hibachi* and *takibi* as a child, he first designed and experienced spaces centered on fireplaces while working under Antonin Raymond (1931–1941). Such designs ranged from the towering central stone fireplace in the Troedsson House (1931) adjacent to Nikko Shrine to the fireplace wall shaping the living room of the House in Montauk Point, New York (1941–42). Yoshimura directly experienced life centered on the fireplace in Raymond’s 1933 Raymond Summer Studio; while the warmth of the fire would have reached the loft drafting spaces where Yoshimura worked, he could also relax in the living space in front of the fireplace open to the mountain landscape. In subsequently travelling to the United States, Yoshimura continued life and work between the two fireplaces in the extended living/drafting space of Raymond’s transformation of a Quaker farmhouse in New Hope, Pennsylvania (1939). The fireplaces both anchored the space structurally and spiritually through its sounds, smells and sights. Yoshimura incorporated all of these lessons in his own mountain lodge in Karuizawa (1962), featuring an outdoor fireplace at the base, and indoor fireplace anchoring the upper living space. Yoshimura’s own sketch of the villa’s section depicts his focus on the fireplace.

His sketch of the Residence at Pocantico Hills depicts an analogous section of an elevated living space / fireplace and sloped roof, with an additional outdoor fireplace below. In refining the design of the living room fireplace, Yoshimura integrated a slender wooden enclosure with a delicate ellipsoidal flue leading to the sloped roof illuminated by a clerestory window above. In counterpoint, the corner of the living room features a tokonoma as the Japanese hearth beyond a setting of furnishings by George Nakashima. In balancing public and private spaces, Yoshimura further designed a fireplace as the focal point of the master bedroom and a family room fireplace shaped by a gently curved copper flue. In providing multiple foci inward towards the fireplace and outward to the *tokonoma*, Yoshimura structured living between east and west fundamentally centered on the primary element of fire to engender the dynamics of human habitation.

1　Yoshimura Junzō, 『火と水と木の詩』 (*The Time of Fire, Water and Wood*) Tokyo: Shinchosha, 2008, 77.「火というのは、誰でも火を持つことをやってみたら、皆好きになりますね。これは昔からの人間の身体の中にある本能でしょう。一つの。実際に火を焚いて話しをしていると全然、雰囲気が楽しくなってきます」
2　Lucinda Franks, “Hirohito samples American ways,” *New York Times*, October 6, 1975, 1.
3　Katayama Shinya, “Junzō Yoshimura,” *Japan Architect* 59, Autumn 2005, 106.

6章

吉村順三の建築

〈インタビュー〉
住まい手の声を聴く

吉村順三は、住まい手や使い手のライフスタイルや行動特性を細やかに検証し、作品の隅々にまで使いやすさへの心遣いを宿しました。それらの作品は、住まい手が長く使い続けることにより、自らがその空間を自分らしく育てる余白を残しています。その設計原理は、吉村順三の建築が愛され、使い続けられる所以といえるでしょう。現在、吉村の建築を継承する人々へインタビューを行いました。

ソルフェージスクール
「これからも大切に使い続けたい建築」

吉村隆子
（吉村順三の長女、公益財団法人ソルフェージスクール理事長）

猪熊邸
「画家が描いたモダンライフ」

大澤悟郎（建築家）／片岡葉子（猪熊夫人文子の姪）

ご両親から引き継がれた想い

ソルフェージスクールでは、ノエミ・レーモンドさんから紹介されたマリー・シャセバンの音楽教育メソードを大切に受け継いでいます。楽譜には、音程やリズムだけでなく、色彩や情感まで作曲家が表現したいものが描かれています。それを身体全体で理解できるような音楽教育を目指した母の精神とそれを空間で支えた父の想いを次世代へも伝えたいと思っています。

空間の豊かさ

この建築の中で好きな場所は3階のホールです。天井が高く開放感があり音響が良いことと、横窓が連続して明るく、空の広がりを遠くまで感じられます。音楽会やリトミックのクラスにも使え、子ども達はのびのびと音に反応して体を動かせます。折り畳み椅子が収納できるスペースも取られ、無駄がなく、広く使えるように工夫されています。子ども達がリトミック以外の時間でも身体を動かして遊んでいる様子を見ると、ホールは楽しい空間になっているのだと思います。

長く使い続けられる理由

この建築は、竣工以来、設計に込められた想いを継承し、当時のまま形を変えず使い続けています。受付カウンターやベンチなど、家具も当時のまま使っています。一つの目的のためだけでなく、様々なことに使える様に設計されたこの建築は、このスクールの豊かな活動を支えていると思います。

プロポーションとコンポジション

猪熊は常々、物と空間のコンポジションを意識していました。施主を深く理解した吉村氏だからこそ設計できたプランとプロポーションの良さを感じる家だと思います。猪熊は物を集めるのが好きでしたが、集めたものを飾る棚が用意され、絵を飾るように変え、日々の生活を楽しんでいました。

オリーブの木がある家

この家は、オリーブの木を中心にして設計されましたが、その木は猪熊が亡くなると共に枯れ、切り株からひこばえが生まれました。今は、そのひこばえが育っています。ニューヨークと日本を往き来し、多くの友人をもてなした猪熊夫妻のライフスタイルに合わせたオープンなキッチンと、絵が映える白い空間。オリーブの木を囲む大きな開口部を持つリビングは、アーリーアメリカンの家の低い天井をイメージしたと聞いています。玄関から入る吹き抜けの螺旋階段の空間と、低い天井のリビングに繋がる空間のリズムが心地良さを生んでいます。

名住宅を継承すること

この家は猪熊夫妻のための家ですが、次の世代へ繋げていくということも建築家の役割だと思っています。図面や写真で見ても、空間の良さというのは実体験がないと分からないことだと思います。そういう意味でも、この建築を残して建築家を目指す若い世代の人に見せたいという気持ちがあります。

青山タワービル
「建物の骨格部分に行き渡る吉村先生の思想」

隈 研吾（建築家）

園田高弘邸（現・伊藤邸）
「音と光と風が流れる空間」

園田春子（園田高弘の妻）

ジャパン・ソサエティー
「温かく迎える『おもてなし』の空間」

ジョシュア・W・ウォーカー
（ジャパン・ソサエティー理事長）

青山タワービルの建築の魅力

一種の青山の象徴といえるビルだと思います。高層ビルでありながら品が良く、外苑周辺の緑に近く他にはないような環境の良い場所に、ぴったりと嵌っている感じがします。ここに居るだけで吉村氏の思想が自分の中に伝わってくる感じがします。

吉村順三の設計理念

作品全てに感じることですが、環境も含めて人間らしい生活が一番大事だという考えが随所に現れています。それは、建物の表層だけでなく、骨格から行き渡り、高層ビルにおいても成立するということを示しています。また、柱がなくても支えられているように感じる大きなピロティと青山通りの関係性、ホールへ通じる階段とテラスの構成は、都市と建物の繋がりが、それまでのアメリカの高層ビルとは全く違う関係性を提案していると思います。

吉村順三の建築の重要性

戦後、日本は、西欧からモダニズム建築を学んだと教えられてきましたが、私は逆だったのではないかと思います。日本の伝統的な建築の透明性や、開放性は、モダニズム建築に影響力を与えました。その過程で吉村氏の果たした役割は大きかったと思います。吉村氏は1954年にMoMAの庭に松風荘を作り、日本の建築空間を実物を通じてアメリカに伝えました。これはモダニズム建築の歴史の中で大きな出来事だったと感じています。

建築家・吉村順三との出会い

義父の友人で藝大の先生が、当時助教授でいらした吉村先生を紹介くださいました。両親の庭の隅に、小さな佇まいですが、中心にはグランドピアノが2台置ける場所が欲しいとだけお伝えし、それ以外の設計はすべてお任せしました。

居心地や使い勝手の良さ

天井の高さが居間は極端に低くなっています。居間の隅には大きく外に開く開口部があり、窓際のソファは、引き出すとベッドにもなります。5〜6人のディナーもできるようになっており、暖炉もあるので、この場所に座ると、ゆったりした居心地の良い時を過ごすことが出来ました。ピアノ室は音楽スタジオという感じで天井が高く、音がよく響く理想的な空間です。2階の寝室まで襖で開け閉めでき、家全体に音が響き渡る作りになっています。

設計のきめ細やかさ

ピアノのある部屋は床が2段階段で下がっています。襖を開け入口から入ると、目線よりも下にピアノが見えるため、威圧感や圧迫感が全くなく、狭さを感じません。よく見ると「あ、ピアノがある」と分かるほどで、細部にわたる心配りが実に深いと思います。2階の寝室には、額縁のように風景を切り取る窓があり、その配置がすばらしいと思っています。隅々に渡るまで考慮された吉村先生の設計理念が小さくてもギュッと詰まった家だと思います。

ジャパン・ソサエティーと吉村順三氏

116年の歴史をもつジャパン・ソサエティーは、日本とアメリカの絆・理解促進というミッションのもと、幅広い分野を通じて、両国の人々が集う場を提供しています。ジャパン・ハウスは、ニューヨークの拠点として1971年に吉村順三氏により設計されました。

ジャパン・ハウスが伝える日本文化

ジャパン・ハウスは、日本の精神を具現化し、生命を吹き込んだ場所だと思います。世界で最も慌ただしいニューヨークの通りから、一歩足を踏み入れると、檜に囲まれた中庭には滝が流れ、心を落ち着かせることができます。また静謐な空間は、難しい会議に取り組む時でさえ、居心地の良さと安らぎを与えます。それは、吉村氏の設計の背景にある意図であり、彼が創り上げた調和だと思います。

吉村順三氏の卓越した空間デザイン

ジャパン・ハウスのロビーや廊下、応接室や私の執務室では、ジョージ・ナカシマ氏の家具が使われています。訪れる人はごく自然に、作品に触れ、建築と調和した空間に身を置くことが出来ます。吉村氏は人々を圧倒する建築や空間を作ろうとはせず「おもてなし」の感覚を大切にしました。この建築は、設計の質を通じて人々の深い繋がりを生むものだと思います。それは日本の「絆」という言葉で表現されるのではないでしょうか。

会場写真（全て撮影：光齋昇馬）

建築家・吉村順三の眼（まなざし）　アメリカと日本

JUNZO YOSHIMURA'S VISION　Between the U.S. and Japan

会期：
2023年12月22日［金］–2024年3月28日［木］
休館日：日曜・祝日、
2023年12月28日［木］–2024年1月4日［木］
開館時間：
10:00–18:00（土曜・最終日17時まで）
会場：ギャラリー エー クワッド

［関連イベント］
シンポジウム
「吉村順三の建築 —アメリカと日本— 日本編」
日時：2024年2月13日［水］ 18:00–20:00
会場：竹中工務店東京本店2階Aホール
講師：
益子義弘（建築家、東京藝術大学名誉教授）
林 寛治（建築家、吉村順三設計事務所元所員）
藤井 章（建築家、吉村順三設計事務所元所員）
大澤悟郎（建築家、猪熊邸継承者）
松隈 洋（神奈川大学教授、京都工芸繊維大学名誉教授）
—
シンポジウム
「吉村順三の建築 —アメリカと日本— アメリカ編」
*期間限定配信
講師：
ケン・タダシ・オオシマ（ワシントン大学教授）
田中厚子（建築史家）
シャーロット・レーモンド
（写真家、レーモンド・ファーム・センター 共同ディレクター）
ウィリアム・ウィテカー
（ペンシル・ベニア大学建築アーカイブ キュレーター）
松隈 洋
—
シンポジウム
「吉村順三の眼差しを継承すること」
日時：2024年3月6日［水］ 18:00–20:00
会場：竹中工務店東京本店2階Aホール
講師：
益子義弘
藤井 章
堀部安嗣（建築家）
六角美瑠（建築家、神奈川大学教授）

主催：
公益財団法人 ギャラリー エー クワッド
岡部三知代、徳平 京、深澤悠里亜、風當嘉津美、
石井康友、真鍋頼子、北原英雄
白川裕信

特別協力：
吉村隆子（公益財団法人ソルフェージスクール理事長）

監修：
松隈 洋

協力：
秋山信行、近藤高史、北澤興一、田中厚子、
ウィリアム・ウィテカー、ケン・タダシ・オオシマ、
シャーロット・レーモンド、
中原まり、影井富子、
永田花、永田昌民、小森正和、
大澤悟郎、片岡葉子、隈 研吾、
園田春子、ジョシュア・W・ウォーカー

吉村順三記念ギャラリー
吉村設計事務所
神奈川大学建築学部
レーモンド・ファーム・センター
株式会社レーモンド設計事務所
米国議会図書館
丸亀市猪熊弦一郎現代美術館
高知県立美術館 石元泰博フォトセンター
Japan Society
ニューヨーク近代美術館
ペンシルベニア大学アーカイブ
株式会社北澤建築設計事務所
一般社団法人住宅遺産トラスト
公益財団法人ソルフェージスクール
隈研吾建築都市設計事務所
青山タワービル
八ヶ岳高原音楽堂
公益財団法人国際文化会館
一般財団法人脇田美術館
神奈川大学内田研究室

編集・発行：
公益財団法人 ギャラリー エー クワッド

翻訳：
Ted Richards

会場写真：
光齋昇馬

デザイン：
木村幸央

映像制作：
森内康博（らくだスタジオ）

アドヴァイザー：
酒井忠康（世田谷美術館館長）
木下直之（静岡県立美術館館長・神奈川大学特任教授）
和氣雅子（株式会社AWP 代表）

模型制作：
神奈川大学建築学部建築学科

指導教員：
松隈 洋、山家京子、曽我部昌史、野村和宜、
鈴木信弘、中井邦夫、六角美瑠、立花美緒、
上野正也、吉岡寛之、柏原沙織、印牧岳彦、
姜 明采、鈴木成也、塩脇 祥、菊井悠央

教務技術職員：
河内由希

制作学生：
［園田高弘邸（現・伊藤邸）］
伊東歩武、小菅大雅、王 煜輝

［猪熊邸］
小野美咲、松村桃子、袁 文玥

［軽井沢の山荘（吉村別荘）］
長谷莉奈、森田泰正、黄 凱

［ソルフェージスクール］
黒澤春輝、遠藤優真、坂部龍飛、井上恭成、
細川寛貴、和田峻介、丹山雅貴、宮外遼太郎

［青山タワービル／タワーホール］
山下由聖、濱 大智、蘇 彦伯、富田響真

［八ヶ岳高原音楽堂］
三井田昂太、齊川優香、田中宏武、
顔 暁天、Hermet Solène、Tetzlaff Lena

*「ボカンティコヒルの家」の模型は、2005年に東京電機大学工学部建築学科山本圭介研究室の皆さまが制作したものをお借りしました。

———

主要参考文献：
- 『吉村順三作品集（1）1941–1978』新建築社、1979
- 『吉村順三作品集（2）1978–1991』新建築社、1991
- 『別冊新建築 日本現代建築家 シリーズ7 吉村順三』新建築社、1983
- 『吉村順三建築展 —建築家吉村順三の作品とその世界』新建築社、2005
- 『吉村順三のディテール 住宅を矩計で考える』吉村順三・宮脇檀、彰国社、1979
- 『火と水と木の詩 —私はなぜ建築家になったか』吉村順三、新潮社、2008
- 『生活空間の詩（うた）／建築家・吉村順三展 三里塚教会と木造住宅を通して』京都工芸繊維大学 美術工芸資料館、2014
- Uncrating the Japanese House: Junzo Yoshimura, Antonin and Noémi Raymond, and George Nakashima, William Whitaker, August Editions, 2022
- 『建築と暮らしの手作りモダン アントニン&ノエミ・レーモンド』鈴木博之 他、美術館連絡協議会、2007
- 『ロックフェラー家と日本 —日米交流をつむいだ人々』加藤幹雄、岩波書店、2015

表紙：ニューヨーク近代美術館（MoMA）の中庭に展示された「松風荘」（1956年／© 2023 Digital image, The Museum of Modern Art, New York / Scala, Florence）

© 2024 GALLERY A⁴　本書の一部または全部を複製、転載することを禁じます。

THIS IS MECENAT 2023

ギャラリー エー クワッド
公式ウェブサイト
https://www.a-quad.jp/